

● 21世紀の在宅医療

[第3回]

在宅医療における
医療連携ネットワーク「Net4U」の活用

三原 一郎

鶴岡地区医師会
理事

土田 兼史

鶴岡地区医師会
理事

長谷川 典子

鶴岡地区医師会訪問看護ステーション
ハローナース 所長

在宅医療における医療連携ネットワーク「Net4U」の活用

みはら いちろう
三原 一郎 鶴岡地区医師会 理事
つちだ けんし
土田 兼史 鶴岡地区医師会 理事
はせがわ のりこ
長谷川 典子 鶴岡地区医師会訪問看護ステーション ハローナース 所長

鶴岡地区医師会では、医療連携ネットワーク「Net4U」を運用し、今年で4年目を迎える。Net4Uは、電子的ネットワークを利用することで、複数の施設間での診療情報の共有を可能とする。本年1月現在、登録患者数は6,667名に達し、この手のシステムとしては全国でもまれな実運用事例である。特に在宅医療においては、多くの患者の診療情報がかりつけ医、訪問看護師、慢性期リハビリ病院、専門医などの間で共有され、患者・家族を中心とした多施設間の円滑かつ質の高い連携を図る上で、欠かせないツールになりつつある。まだまだ課題も多いが、患者中心の情報共有ツールとして、より広範に地域内に普及することを期待したい。

キーワード 電子カルテ、医療連携、電子ネットワーク、在宅医療、訪問看護

はじめに

鶴岡地区医師会は山形県鶴岡市と周辺6町村(人口約16万人)をカバーし、その地域内には鶴岡市立荘内病院を中核病院として約100の医療機関が分布している。当地区医師会では1997年に医師会事務局、各医療機関、訪問看護ステーションなどを相互に結ぶイントラネットを構築し、情報化を推進してきた。現在イントラネットの加入率は約70%である。

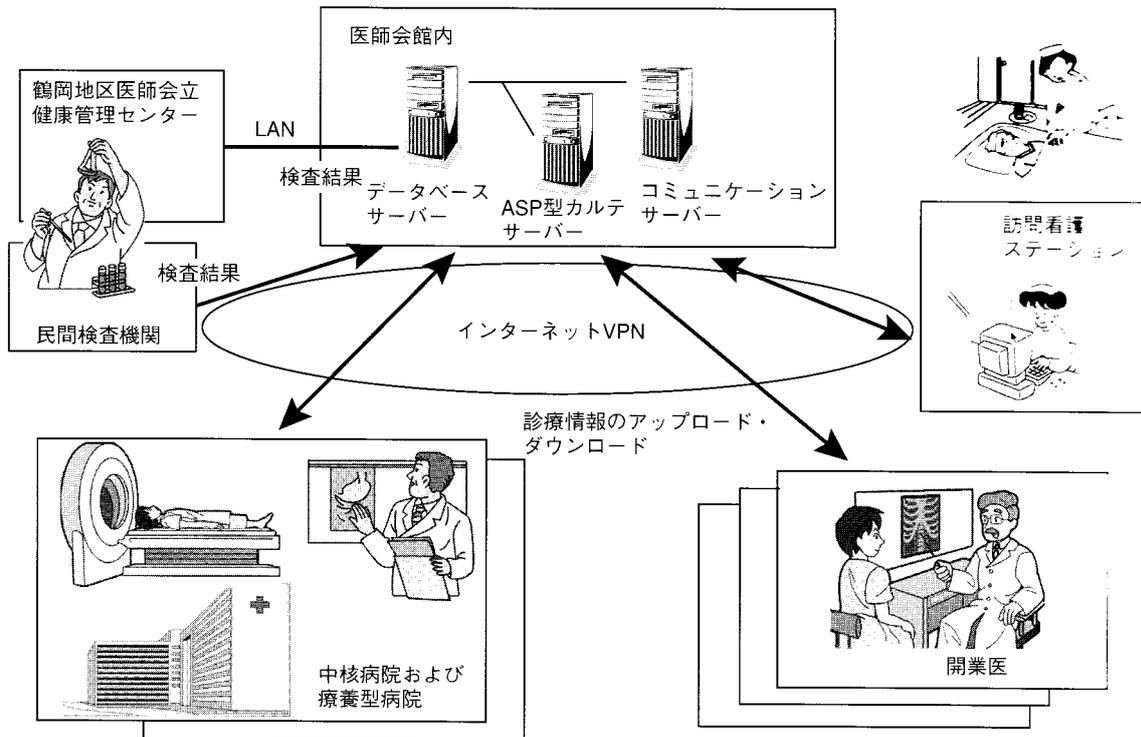
在宅医療に関して言えば、同年に在宅患者情報データベース化し、複数の医師および訪問看護師がその情報を共有することで、在宅医療24時間体制の支援するシステムを運用してきた。さらに2004年には、経済産業省の補助事業である「先

進的IT活用による医療を中心としたネットワーク化推進事業」に参画し、ネットワーク化された電子カルテシステム「Net4U(ネット・フォー・ユー)」を開発、2002年1月に運用を開始し現在に至っている。

Net4Uとは

Net4Uは、“the New e-teamwork by 4 Units”の略称である。4 Unitsとは 病院・診療所・訪問看護ステーション・検査センターを指しており、またその読みには“あなたのための(for you)ネットワーク”という意味を込めている。2005年1月現在、Net4Uへの参加機関は病院5施設、診療所25施設、訪問看護ステーション1施設、臨床検査センターお

図1 Net4Uの仕組み



および民間検査会社3社である。運用当初4,557名であった登録患者数は、その後も月100名弱程度の順調な伸びを示し、今年1月現在6,667名となっている。

このシステムはASP(Application Service Provider)方式で運用され、すべてのアプリケーションや患者情報などのデータは医師会館内のサーバーで一括管理されている(図1)。診療情報の共有は患者の同意の下に、利用者が通院した医療機関でのみ可能で、それ以外では閲覧することができない仕組みとなっている。

ハローナースと情報化

当地区医師会が運営する訪問看護ステーション(ハローナース)は1996年4月に発足した。上記1市6町村を訪問地区とし、延べ登録患者数は今年1月現在で923人を超え、常時150人くらいの利用者を訪問している。またサテライト方式を取り入れ、地区内に4つのサテライトを配置して、地域に密着した訪問看護を提供できるよう心がけている。ス

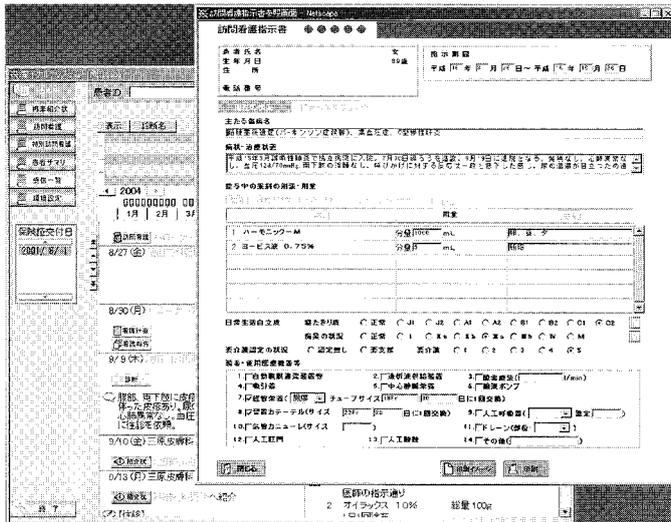
タッフは、事務2名に訪問看護師13名、専任の介護支援専門員2名。また看護師13名中8名が介護支援専門員を兼務している。パソコンは本部に6台置かれ、各サテライトにはノートパソコンを配置している。

医師会の情報化の波はハローナースにも及び、1997年にはイントラネット上に在宅患者データベースを構築し、主治医、連携医、訪問看護師間でのウェブによる診療情報の共有が始まった。また、イントラネット内でのメールを使用して、患者状況の報告や相談を行ったり、褥創や皮膚疾患のデジカメ写真の送受信により、画像情報を医師と共有することもできるようになった。2002年のNet4U運用開始を機に、これら蓄積されたデータは順次Net4Uへ移行した。

在宅医療とNet4U

在宅医療においては、主治医・連携医・訪問看護師など、施設や職種を越えたチーム医療が必要である。そして、よりスムーズなチーム医療を実現

図2 訪問看護指示書作成画面

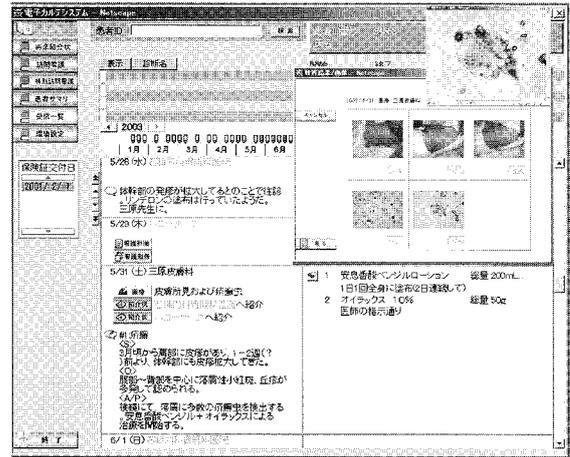


するには、患者の診療情報を施設間で共有できる仕組みが求められている。Net4Uのような電子的ネットワークを利用した医療連携システムは、在宅医療において特にその有用性を発揮している。

ハローナースでは、本年1月17日の時点で、延べ140名の患者をNet4Uへ登録し、11の医療機関との間での連携に活用している。運用方法であるが、主治医と訪問看護師とのカルテの共有は、Net4U上で、訪問看護指示書あるいは紹介状をハローナースに送付することから始まる(図2)。共有が開始されると、ハローナース側では主治医のカルテが閲覧可能となるため、病名、処方、所見などの情報を参照できるようになる。担当看護師は、訪問後その都度患者の状態をNet4Uに記載するようにしている。従って、主治医側も診療所にいながらにして、ほぼリアルタイムに在宅患者の状態を把握することが可能になり、お互いの連携を深めつつ、患者の治療・ケアに当たることができるようになった。また、訪問看護指示書、報告書など、各種書類も簡便に作成、送付することができるため、事務作業の省力化にも役立っている。

さらに、紹介状機能を使い、専門医への往診依頼やその報告にも活用されている。図3・4は、内科かかりつけ医-訪問看護師-皮膚科医の連携例である。この例では皮膚に症状が見られたため、かかりつけ医から皮膚科へ往診依頼の紹介状が送付

図3 医療の連携において使用される電子カルテ



電子カルテの紹介状機能を使った、かかりつけ医-訪問看護師-皮膚科医の連携例。カルテ画面は三者でリアルタイムに共有されるので、お互いがより緊密な連携の下で、治療に当たることが可能となる。この患者からは疥癬虫が検出され、早速治療が開始された。

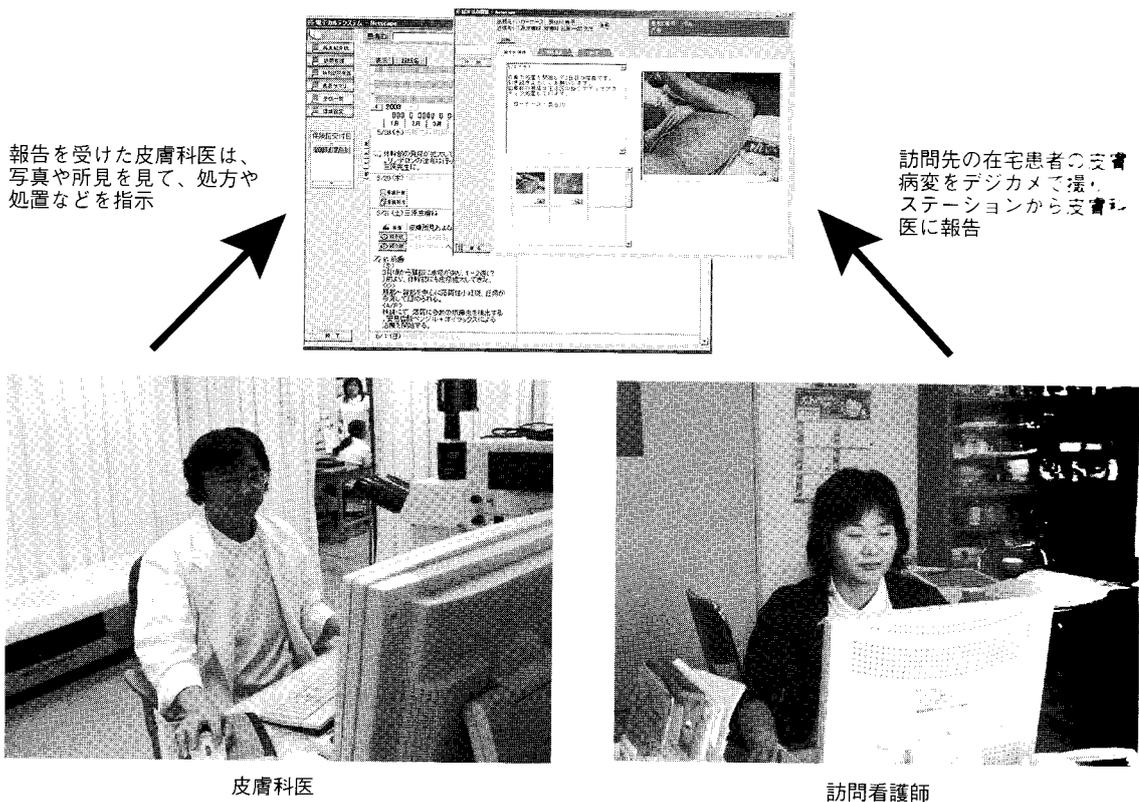
されている。皮膚科医は、依頼を受けて往診し、その結果をカルテに記載し、紹介状機能を利用して、かかりつけ医に結果を報告している。これのやりとりは、訪問看護師も参照できるので、三者が情報を共有しながら、緊密な連携の下、協働して患者の治療に当たることができた。さらに、治療開始後の経過をお互いが確認できるよう、看護師や医師の訪問時の患者の状態をデジカメ画像としてカルテに貼付している。このように画像を活用することで、より正確に情報を伝達することができる。

以上のように、Net4Uは患者・家族を中心とした多施設同士の円滑かつ質の高い連携を図る上で、欠かせないツールになりつつある。

課題と展望

一方、Net4Uにもいくつかの課題が存在する。現時点では紙カルテとの併用であるため、送受信した各種書類を印刷して印鑑を押し、カルテに貼り付ける作業が必要である。また、訪問記録を紙カルテに記入し、なおかつNet4Uに入力する作業も必要なため、看護師からは二度手間であるとの声も聞かれる。情報の共有がプライバシーの侵害にならないよう十分な配慮も必要である。しかし、

図4 皮膚科医と訪問看護師の連携(図3の症例)



そのような課題を抱えつつも、Net4Uは訪問看護師にとって間違いなく魅力的なシステムである。

病院の在院日数短縮化に伴い、在宅療養生活への移行準備が不十分なまま退院を余儀なくされる患者が増加しつつある。当然、訪問看護ステーションを利用する患者の重症度・要介護度も重度化してきていて、退院時における十分な情報伝達・連携はますます重要になっている。入退院時におけるサマリーの共有化も必要不可欠である。Net4Uはそのような状況におけるひとつの解答になり得ると思われる。

おわりに

最近普及してきた電子カルテが、単に個々の医療機関で利用される孤立したツールである限り、上記のニーズに応えることはできない。Net4Uのような地域連携ネットワークシステムが、患者中心の情報共有ツールとして、より広範に地域内に普及し、ひいては全国的に普及していくことを願うものである。